

井上靖「楊貴妃伝」論

— 典拠と宦官・高力士の役割 —

はじめに

「楊貴妃伝」は昭和三十八年から昭和四十年まで『婦人公論』に連載された長編小説である。昭和四十年には単行本が刊行された。この作品は、開元二十八年（西紀七四〇年）に楊貴妃が玄宗皇帝に召されて温泉宮に赴いた時から、天宝十五年（七五六年）に縊られるまでの十七年間のことを編年体で綴っている。楊玉環は玄宗に召された後、玄宗の寵愛を一身に受けて、楊貴妃になった。楊貴妃によって、楊家一門の者たちは大きく昇進し、榮華を極めた生活を送ったのである。天宝十四年十一月、安祿山が叛乱を起こした。楊貴妃は玄宗と共に蜀へ落ちのびた際、高力士により、馬嵬駅で殺されたのである。

中国の古代の宮廷では、皇帝および妃たちの生活に関する諸

事務は宦官が担当していた。大野実之助は宦官の意味について、「宦官というのは、男性の機能を失ったいわゆる閹人が任せられた官人で、禁中の宮人たちの簿籍・疾病・門衛などの諸事務をつかさどる職責をもっていた。」^[1]と説明した。そして、宦官の中で、一番偉い人は、皇帝の側近として仕えることになったという。

中国の唐時代の宦官制度については、『新唐書』の列伝第三百十二「宦官上」のはじめに、以下のように説明されている。

太宗詔内侍省不立三品官、以内侍為之長、階第四、不任以事、惟門閤守禦、廷内掃除、稟食而已。武后時、稍增其人。至中宗、黃衣乃二千員、七品以上員外置千員、然衣朱紫者尚少。玄宗承平、財用富足、志大奢、不愛惜賞賜爵

蘇
洋

位。開元、天寶中、宮嬪大率至四萬、宦官貴衣以上三千員、衣朱紫千餘人。其稱旨者輒拜三品將軍、列戟于門。其在殿頭供奉、委任華重、持節傳命、光焰殷殷動四方。²⁾

この史料によると、太宗の時代には、内侍省に三品の位をおかず、その長官内侍も位は四品に止められていた。内官は政治上の実権を持たず、宮門の守禦や、宮廷の掃除などをつかさどるだけであった。則天武後の時代になって、内侍官の数を増加し、さらに、中宗の時代には、七品以上の内侍官が二千人に達したが、朱紫の衣（古代高官の服を指す）を着ける者は少なかつた。しかし玄宗の時代となってからは、内侍官を重視し、朱紫の衣を着ける者が千人以上に達した。玄宗の意にかなう者は、三品の將軍を授けることができるようになった。すなわち、玄宗時代に、宦官の地位が高くなったのである。さらに、宦官は皇帝の従僕であるばかりでなく、宮廷の高官でもあったことが分かる。

さて、玄宗の側近に仕えた宦官の一人として、高力士をあげることができる。³⁾高力士は、玄宗皇帝時代の宦官として絶大な力を持つていった。井上靖は、これら宦官の勢力が強まった中国の様相を正確に把握し、「楊貴妃伝」でも、楊貴妃の辿る運命

の鍵を握るキーパーソンとして高力士を描いた。高力士は玄宗皇帝の影のように存在していた人物であり、また、最後に玄宗が蜀へ避難する途中、玄宗の命を受け、馬嵬において楊貴妃を殺した人物でもある。玄宗、楊貴妃の両者は高力士と深い関わりがあったことが、作品中でも活写されている。高力士について早くから注目していた秋岡康晴は「玄宗に影のように寄り添う高力士は語り手的役割を演じ、時代の推移を見守る黒幕でもある。」⁴⁾と述べ、「楊貴妃伝」での高力士の役割について指摘した。しかし、秋岡は、作品中で高力士が果たした役割の詳細な分析や高力士を描くために井上が使用した中国の文献、すなわち典拠などに関してほとんど論じていない。

本稿では、先行研究を踏まえて、高力士に関する史料をあげ、「楊貴妃伝」との共通点や、井上が創作したところを指摘する。さらに、井上の創作した部分に着目し、高力士が楊貴妃にとつてどのような役割を演じたのか、そのことによつてどのような楊貴妃像が描き尽くされたのかを論究していきたい。

一、高力士に関する歴史的な評価

まずは、「楊貴妃伝」を考察する前に、中国の歴史資料および

日本の研究書を取りあげ、一般的に、高力士に関する評価がこれまでどのようになされてきたのかを考えてみたい。高力士の碑文は『金石萃編』に収録されている。その碑文の一部は次のようなものである。

卿宰臣、因以決事、中立而不倚、得君而不驕、順而不諛、諫而不犯。⁵

この碑文によると、高力士は政治生活では、中立の立場をとり、うぬぼれがなく、こびへつらわない人だったことが分る。

また、『新唐書』では、高力士に対する呼称は以下のように記されている。

肅宗在東宮 兄事力士 它王 公主呼為翁 戚里諸家尊曰爺 帝或不名而呼將軍⁶

すなわち皇太子は「兄」という呼称で高力士を呼んでいた。皇太子以外の諸王とか、公主とか、高力士のことを「翁」と呼んだ。皇帝の親戚は高力士を「爺」と称した。玄宗皇帝は時には高力士を「將軍」という呼称を使ったのである。

宮廷の人々がつかった高力士に対する呼称を通して、高力士は宮廷において重要な地位を占めていたことが推察される。

さらに、『新唐書』の中では、高力士の最期に関して次のように書かれている。

代宗以護衛先帝勞 還其官 贈揚州大都督 陪葬泰陵⁷

高力士が亡くなった後、当時の皇帝代宗は高力士が先帝に忠勤したことを評価し、「揚州大都督」という官位を贈った。さらに、玄宗の墓のそばに高力士を葬ったのである。中国の歴史資料だけではなく、大野実之助『楊貴妃』の中には、高力士を評価した箇所が以下のように記されている。

玄宗の開元・天宝兩年代数十年の久しきにわたって、帝の側近に親しく奉仕し、終始一貫忠誠の心を尽くし、特に天宝末期の騒乱に際しても、はるばる遠く蜀の成都に従幸して粉骨砕心したのは、同じく宦官であった袁思藝が途中から逃亡したのとは全く異なる。袁思藝が誠意に乏しい輕薄の徒であるのに反して、高力士は忠誠の心に旺盛な、まことに善良な人物であったと称揚するに足る。彼は玄宗皇

帝が最も信頼するに足る忠臣であったことは論じるまでもない。⁸⁾(傍線は論者による、以下同)

大野は「力士は忠誠の心に旺盛な、まことに善良な人物であったと称揚するに足る。彼は玄宗皇帝が最も信頼するに足る忠臣であったことは論じるまでもない。」と指摘している。この大野の書は、『新唐書』などの中国の文献をふまえて書かれた記述である。すなわち、宦官・高力士は玄宗皇帝に忠誠を尽くし、玄宗が最も信頼する人物であり、宮廷で重要な役割を果たしたことは明らかである。現在、中国および日本では、高力士は玄宗に対する忠臣として高い評価が与えられていると考えられる。

二、井上が使った高力士に関する史料

ここまで、中国の歴史資料および日本の研究書の中で、一般的な高力士に関する評価について記した。本章では、井上が使った高力士に関する史料に注目する。高力士に関する史料と「楊貴妃伝」を比較し、玄宗と高力士の関係について考察していく。まず、井上靖は「楊貴妃伝」を創作するために、どのような史料を参考にしたのかを「『楊貴妃伝』の作者として」の中で次

のように記している。

小説の内容は「旧唐書」、「新唐書」、「資治通鑑」等の史書の記述を骨子にしているが、白居易、杜甫等の唐代詩文からもその材を得ている。

また、「長恨歌伝」、「楊太真外伝」、「梅妃伝」、「開元天宝遺事」、「安祿山事蹟」等の唐宋代の伝記の類も一応参照しているが、史書の記述から離れているものは、なるべくこれを避ける態度をとっている。⁹⁾

高力士に関する史料を調査するにあたって、井上は『旧唐書』、『新唐書』、『資治通鑑』などの唐宋の史書を参照したことが分かる。

『新唐書』では、高力士という人物を紹介した箇所について、以下のように記されている。

高力士 馮盎曾孫也 聖曆初 嶺南討擊使李千里上二闕
兒 曰金剛 曰力士 武后以其彊悟 敕給事左右 坐累逐
出之 中人高延福養為子 故冒其姓 善武三思 歲餘 復
得入禁中 稟食司宮臺¹⁰⁾

翻訳 高力士は馮盎の曾孫であつた。聖暦の初め、嶺南討撃使李千里の推薦を得、闍兒として金剛とともに宮中に出仕した。高力士が聡明叡智な為、則天武后に認められ、則天武后の左右に仕えていた。高力士が他人から巻き添えを食われ、一時宮廷から放逐された。しかし、一年あまりの歳月が経過すると、高力士が高延福の養子として再び禁中に入り、司宮台に属したのである。

井上は『新唐書』を参考にし、「楊貴妃伝」には、以下のよう
に描いた。

高力士は嗣聖元年（西紀六八四年）、藩州（広東省の一部）に生れ、玄宗より一歳年長だつた。本姓は馮、母は麦氏、高延福なる人物に養われたところから高氏を称するに到つたと言う。聖暦の初め（西紀六九八年頃）に嶺南討撃使より闍兒（去勢された兒）として献じられ、禁中にはいり、長じて武后に仕え、司宮台（内侍省）に於て后妃の館の出入を掌る吏となつた。玄宗の代になるや、忽ちにして玄宗の信任を得、形影相伴うごとく、その傍より離れずして今日に到つていた。（二）

先に挙げた『新唐書』での高力士という人物について書かれた部分と比較すると、高力士の名前の来歴および宦官になる過程など、史料と共通した記述があることが明確になつた。井上は高力士が宮廷から放逐されたことは、「楊貴妃伝」では使わなかつた。そのかわりに、「玄宗の代になるや、忽ちにして玄宗の信任を得、形影相伴うごとく、その傍より離れず」というように、高力士が玄宗に信任を得たことを強調したのであつた。

高力士と玄宗の関係については、『資治通鑑』の中で次のように記されている。

高力士、尤も上の寵信する所と為る。嘗て曰はく、「力士・上直すれば、吾寝ぬること則ち安し」と。故に力士多く禁中に留まり、外第に至ること稀なり。¹¹

玄宗は「力士・上直すれば、吾寝ぬること則ち安し」と語つた。井上はこの史料を参照したうえで、玄宗が深夜に怯えた言葉を創作した。井上が作中で創作した箇所を以下に引用する。

「老爺は居らぬか。高力士は居らぬか。老爺を呼べ、高力士を呼べ」

玄宗は寝台の上に半身を起している。(中略)

権力者は疲れが出たのか、寝台に横たわると、すぐ眠りにはいった。いかにも高力士が同じ宮殿の内部に泊っていることを確めて、それで安心したといったたわいなさがあった。(一)

『資治通鑑』では、玄宗の「力士・上直すれば、吾寝ぬること則ち安し」という短い言葉だけが記されている。井上はこの史料に基づき、玄宗がたびたび深夜に驚いて悪夢から覚めて、高力士の名を呼ぶ場面を描出した。この描写には、玄宗の孤独な権力者としての姿が表現され、史料よりは、玄宗の心理も深く掘り下げられている。

高力士は玄宗にとって、信用できる人であった。玄宗は朝廷の政事について常に高力士の意見を聞いた。次に、玄宗と高力士の政治に関する二つの会話について説明する。まずは一つ目である。玄宗は年をとってしまったので、政務は宰相に任せ、軍事を將軍に任せていた。高力士は、この玄宗の方針に対して、危惧されることを堂々と伝えた。中国の史料『新唐書』の「列伝第百三十二 宦者上」では、玄宗と高力士の会話について、以下のように記されている。

帝嘗曰 朕春秋高 朝廷細務付宰相 藩夷不冀付諸將
寧不暇邪 對曰 臣聞至閭門 見奏事者 言雲南數喪師
又北兵悍且彊 陛下何以制之 臣恐禍成不可禁¹²⁾

翻訳 玄宗は「朕は、もう年である。朝廷の政務を宰相に任せ、

藩夷の軍事は諸將に任せてから、朕は暇になった。」と高力士に語った。

高力士は、「臣がたまたま閭門に行つて、奏事者から聞いたが、雲南の作戦では屢々兵団を喪失したらしい。さらに、辺境の將軍は精強な兵士を擁していた。陛下は何をもつてこれを制するのか。臣は禍が起きたら、止められないことを恐れていた。」と答えた。

「楊貴妃伝」にも同じような場面がある。

ある日、玄宗は高力士に言った。

「余はいま老いた。朝事はこれを宰相に任せ、辺境の軍事はすべて諸將に任せている。幸いに憂うることはない」

すると、高力士は言った。(中略)

「臣は聞いております。雲南の作戦では屢々兵団を喪つてお

ります。また辺境の武將たちは兵を擁して勢甚だ盛んなるものがあります。陛下はどのようにして、これをお制しになるのでございましょう。いったん禍を發した場合、收拾つかぬ状態になることを、高力士は恐れるばかりでございませぬ。どうして憂うることがないと申せませぬ」(一六)

前述した『新唐書』の中で記された会話と「楊貴妃伝」での記述を比較すると、玄宗と高力士の会話内容は、ほぼ同じだと判断できる。このことより、井上は『新唐書』の「列伝第百三十二 宦者上」の中から、高力士に関する箇所をとりあげ、玄宗と高力士の会話を描き出したのだと分かった。

次に二つ目の会話を説明する。玄宗は年をとり、政務に倦怠感をおぼえた。そこで、朝廷のことはすべて宰相・楊国忠に任せただけである。このことについて、高力士が玄宗に語った箇所が『新唐書』の「列伝第百三十二 宦者上」に次のように記されている。

力士曰 自陛下以權假宰相 法令不行 陰陽失度 天下事庸可復安 臣之鉗口其時也^③

翻訳 高力士は「陛下は權力を宰相に仮してから、法令も行われず、陰陽は度を失った。天下は安定し難いが、臣は敢えて言わざる。」と言った。

作中では、『新唐書』とよく似た会話が以下のように描かれている。

高力士は言った。

「陛下が權を宰相にお与えになつてから、賞罰は公平でなく、陰陽は度を失つてしまいました。こうなりましては、高力士もどうしたらいいか判りませぬ」

これに対して、玄宗はこの時も、
「判っている」
とだけ答えた。(一六)

宰相・楊国忠に政治の実權を握らせることに、高力士が警戒心を持つていたことが、『新唐書』には示されている。井上は、この史料に忠実に従い、「楊貴妃伝」の中で、高力士の諫言を描いたのである。

以上、玄宗と高力士の政治に関する二つの会話から、高力士

は政治のことを客観的に分析でき、玄宗を守る立場に立っていたと言えるだろう。この二つの会話は、高力士が玄宗にいかにか信頼されていたかを強調するものであった。

井上は中国の史料をほぼ忠実に引用し、玄宗と高力士の関係について描いたことが確認できた。作中では、一章に挙げた歴史的評価と同じように、高力士は玄宗にとって、信頼できる人であり、相談役となり、終始玄宗に忠誠の心を尽くした人物として描かれたのである。

三、井上が創作した高力士と楊貴妃

ここまで、高力士と玄宗の関係について論じた。作中では、高力士は楊貴妃にも重要な役割を果たしている。しかし、中国の歴史文献には、楊貴妃と高力士の関係については記されていない。そのことから、作中の楊貴妃と高力士の関係は、井上の創作だと考えられる。本章では、「楊貴妃伝」の中での楊貴妃と高力士の関係について考察していく。

楊玉環は後宮に入った後、宦官・高力士が「玄宗の一部」としての重要な地位を占めていることを察知し、自分を守るために、高力士に近づきよう考えたことが、以下のように描かれて

いる。

妃となると同時に、敵は多くなる筈であった。(中略)玉環は、今まで即かず離れずといった関係を持っていた宦者高力士に対して、急速に近づいて行く態度をとった。

玉環には自分の周囲の人物で高力士が一番厄介な存在に見えた。玄宗の心に喰い入っている所謂寵臣なるものは何人かあったが、高力士の場合寵臣といったようなものではなく、玄宗との関係はもつと緊密で、特殊なものであった。少し大袈裟に言えば、玄宗の一部とすら言ってよかった。

(二)

楊玉環は「妃となると同時に、敵は多くなる筈であった」ことを自覚する。だから自分を守るために、高力士の力に頼るべきだと信じていた。玉環は玄宗に召されてから一年半たったある日、はじめて高力士と二人だけで晚餐をした。そのとき、楊玉環は、高力士に自分の力になってほしいと伝えた。作中では、この場面について次のように書かれている。

天宝と改元した年の五月、玉環は初めて、高力士を己が

館に招じて、晩餐を共にした。(中略)

「玉環も帝に召されてから一年半の歳月を過しまして、後宮の女というものがどのようなものかも一応判りました。それで、今日、お越しを戴いて、改めて玉環についてお力になつて戴くことをお願いしたいと思ひました」

と言つた。すると、

「妃さまにお言葉をかけて戴いて、高力士身に余る倅せでございます」

高力士は言つた。高力士はいつも玉環のことを「妃さまと呼んでゐた。

「高力士こそ、妃さまにお力になつて戴きたく思つておりました。それが、今日、お声がかかりまして、このような悦ばしいことはございませぬ」(二)

「お力になつて戴く」という楊玉環の希望を、高力士ははつきりと承諾した。この楊玉環と高力士の会話は、お互いに心意が通じたことを暗示する。この会話は全く史料の中では記されていないため、井上の創作箇所だと考えられる。このように、作中での高力士が楊貴妃の味方になつたという記述は、後に楊貴妃に降りかかる災難の伏線だと考えられる。

作中では、高力士がどんな性格を持っていたのかについて、以下のように描かれている。

玉環は高力士に急速に結びついて行つた。人の噂では高力士はこれまで梅妃と親しくして、何事に依らずその相談相手になつていたということであつたが、玉環はそのことには一言も触れなかつた。(中略)

玉環が娘子と呼ばれ、妃同様の待遇を受けるようになつた頃から、梅妃の勢力が眼に見えて落ちて行くのが感じられた。高力士も玉環に遠慮してか、次第に梅妃に近づくのを避けている風であつた。(二)

梅妃の勢力が落ちて行き、楊玉環が勢力を持ち始めると、高力士は「梅妃に近づくのを避けている」のである。高力士は世渡りが上手な人物だと考えられる。さらに、作中では、高力士の性格を描く、もう一つの箇所がある。以下に引用する。

高力士は、
「一つだけ、帝にお口添えして戴きたいことがございます。それは静楽公主のことでございますが、帝は夷族に贈るこ

とが惜しくなられ、それを取りやめさせようとなさっており、唐帝国の皇帝として一度口になされたことを中止させることは甚だ香しからぬことでございます。」(中略)「静楽公主は独孤氏の女、帝の御外孫に当られますが、その一族は文をよくし、梅妃さまのおつき合いが濃うございます。これが一つ。——また若し後宮におはいりになるようなことがあれば、梅妃さまのお力にこそなれ——」(二三)

玄宗は静楽公主、宜芳公主を辺境異民族に嫁がせるという手段で、異民族をおさえようと考えた。しかし、玄宗は静楽公主の美貌に惹かれたので、静楽公主を宮中に留めようとした。高力士は玄宗のこの行動を中止させようとし、楊玉環に頼んだのである。高力士は静楽公主が梅妃の力になる可能性があると感じ、楊玉環を刺激したのであった。そして、楊玉環によって玄宗の行動を中止させた。これらの作中での高力士の描き方から、高力士が策謀的な性格を持っていた人物だと分かる。この二つの箇所を井上が創作することによって、史料の中で記されていない策略家の一面を持っていた高力士を描き出すことに成功した。こうして高力士も楊玉環も互いに一層密接にかかわるようになったのである。

この後は、楊玉環にとって、高力士がどんな人物であったのかを詳しく考察していく。高力士と楊玉環に結びつくと同時に、楊玉環のために策略を案じた。そのことが描かれている描写は次の通りである。

「(前略) 妃さまが正式に妃とおなり遊ばすと同時に、これらの方々は妃さまの御兄姉として、それぞれ顕職にお就きになり、妃さまの一番のお力になります。そして、御養父玄璽さまは勿論のこと、その他多くの楊家御一門の方々が、それぞれ御要職に就かれて、妃さまの周囲をお固めになります。こうなれば妃さまの御地位は御安泰でございます。」

(二二)

高力士は楊玉環の地位が安泰になるためには、楊家一門が要職に就くべきだと楊玉環に言いはじめた。この会話は史料の中では記されず、井上の創作だと考えられている。井上は前述した『新唐書』の中で記された高力士が玄宗の最も信用できる人であるという史実から、想像力を發揮し、高力士と楊家一門の関係を創作した。作中では、高力士と楊家一門の關係は次のように描かれている。

「昨夜、妃さまの御一族みなさま、それぞれお役柄において、御昇進なさいました。近日中に、その御発表がある筈でございます」（中略）

貴妃は改めて見直すように、高力士の顔に眼を注いだ。この老いた宦者は、楊家一門の栄達のためには、いかなる機会をも逃さないと思った。（五）

この描写は、楊家一門の昇進が高力士の多大な力添えなしには考えられないことを明らかにしている。そして、楊家一門の中で、高力士は楊釗に注目し、楊貴妃に楊釗を紹介した。井上は「楊貴妃伝」の中で、楊釗のことを高力士が評価した言葉を創作し、以下のように書いている。

楊釗が退つてから、貴妃は高力士に楊釗をどのように思うかと訊いてみた。すると老いた宦者は、「今後妃さまのお力になると考えましたからこそ、お連れしたわけでございます。お気に召しましたでございますよるか」

と言った。（中略）

「他に誰か男の方で、ひとり欲しいところでございます。」

「爺は楊釗さまにお目にかかった時、これで妃さまの御地位は御安泰だと思いました。」（四）

高力士は楊釗が楊貴妃の力になる人物だと考えた。そして、楊釗が「実力を持った高官」になるということを高力士は楊貴妃に伝えたのである。その様子は次のように記された。

「楊釗さまに関する発表が近く行われることでございます。楊釗さまはさき頃度支郎中にお進みになりましたが、この程兵部侍郎兼御史中丞にお昇り遊ばします。妃さまの一族から初めて、実力を持った高官がお出になるわけでございます」

高力士は言った。（五）

作中では、高力士は玄宗に楊釗のことを薦める箇所は描かれていないが、楊釗には高官が与えられた。「こうしたこと陰に高力士が居る」ことは明らかである。この点は、典拠には見られない井上の創作であり、高力士が黒幕の策略家である姿が強調された。楊家一門の者に重い官職が与えられたのは高力士の助力なくては成立しなかったことを、井上はより詳しく描いた

のである。

楊釗は後に楊国忠と改名し、宰相になった。それによって、楊貴妃の地位も安泰になった。楊貴妃は、高力士は自分の味方だと考えていた。そこで、何らかの不安があれば、すぐ高力士に相談した。作中では、楊貴妃が自分の不安を高力士に相談する箇所が以下のようにある。

「人には寿命というものがございます。陛下も亦寿命を持たれております」

すると、相手は暫く黙っていたが、

「妃さまが楊国忠、安禄山のお二人を確りとお握りになっておられれば、どのようなことがあろうと妃さまのお立場は永遠に御安泰でございます。お二人にお目をおかけになって行くでございます」(六)

楊貴妃は玄宗の死後の自分というものを考えた。すると、玄宗が死んでしまった後が心配になり、自分が持っているすべてが太子の手に移ることをおそれた。だが、高力士は「妃さまが楊国忠、安禄山のお二人を確りとお握りになっておられれば、どのようなことがあろうと妃さまのお立場は永遠に御安泰でござ

います」と、楊貴妃を安心させたのである。楊貴妃は高力士のことを、いつか味方だと信じるようになっていった。

後に、楊国忠が安禄山に対して叛意があることを玄宗に言ったことについて、高力士は楊貴妃に次のように意見した。

高力士は顔を貴妃の方に近づけ、声を低くして、

「このようなことを申しても始まりませぬ。妃さまは安禄山をどこまでもおかばいになることでございます。どのようなことがあっても、安禄山をお離しになつてはいけません。安禄山は帝と妃さまには常にお味方でなければなりません。お離しになったら大変でございます。お離しになったら、——太子と」(六)

高力士は安禄山が楊貴妃の味方であると信じていた。楊貴妃も高力士の諫言を受けて、安禄山をかばった。楊貴妃にとって、高力士は相談役であった。楊家一門の昇進および安禄山の地位を確固たるものにすべく、高力士は楊貴妃の裏で画策した。井上は高力士と楊貴妃の関係を作品中で見事に描き出し、高力士に楊貴妃の黒幕としての役を演じさせたのである。井上のこの創造力によって、自身の安寧を保つために高力士に依存し、政

治的権力をすべて高力士に委ねていった楊貴妃の姿が浮かび上がる。

安祿山が反乱を起こしたあと、将士たちはその罪を楊貴妃にかぶせた。高力士はこのことを、玄宗に諫言した。その箇所は以下の通りである。

高力士はやがて、その顔を少しく仰向けると、誰もがこれまで聞いたことのないような奇妙な声を口から出した。泣き声とも、笑い声とも判らなかつた。一語一語長く引いた唄うような調子だつたが、やはりそれは一つ一つ意味を持った言葉であつた。

「貴妃さまには、まことに罪はございません。罪があるなどと誰が申しましょう。併し、将士は既に楊宰相を殺しました。貴妃さまがなおお傍にあるなら、陛下御自身、御安泰ではないと存じます。どうぞ、陛下、とくとお考え下さいませ。いま為すべきことは将士の心を鎮めることでございませぬ。将士安らかなれば、即ち国も安らかなるべきことと存じます。」

(七)

国が危険にさらされた時、老いた宦官・高力士は「一語一語

長く引いた唄うような調子だつたが、やはりそれは一つ一つ意味を持った言葉」で、国の安定のため、楊貴妃を殺すという諫言を玄宗に言い出した。井上はこの高力士の諫言を創作し、高力士が玄宗を守り、国を守る姿を描き出した。高力士は楊貴妃に近づき、彼女を信頼させていくが、結局は、楊貴妃は、高力士にとつては当然ながら皇帝より重要な人物ではなかつた。楊貴妃は高力士に思い通りに動かされただけに過ぎないのである。楊貴妃が最後に、高力士と対話した場面が次のように描かれている。

高力士はそれを承るとすぐ、楊貴妃の居る館の奥へはいつて行つた。貴妃は薄暗い部屋の窓際に椅子を置いて、それに腰かけていた。

「御最期の時が参りました」

高力士が言うのと、一瞬、貴妃は顔色を変えたが、「楊家一門の者が陳玄礼に依つて誅せられたことをいま聞きました。陳玄礼は清廉を以て聞えた武人、日頃陛下をお諫めして誤つたことはありません。誰よりも貴妃がよく知つております」

貴妃は言つた。

「妃さまに罪はございませぬ」

高力士が言うと、

「陛下の御国をこのようにしましたのは楊宰相です。楊宰相は、わたしがあればこそ、あのようには振舞えたのです。どうして、妃たるわたしに罪がないと言えましょう」

貴妃は椅子から立ち上った。(中略)高力士は小さい仏堂のある中庭へ出た。高力士の手には貴妃の咽喉にかけるための布片が握られていた。(七)

楊貴妃が宮廷に入ってから、楊貴妃の生活の安定および楊家一門の昇進は終始高力士の多大な助力なしには考えられなかった。楊貴妃は、自分の味方と認めた高力士の手によって、生涯を終えたのである。高力士という人物を信じすぎたために、死に至った楊貴妃という女性の悲惨な姿で、この物語は終わる。宦官高力士の策略に振り回され、権力など持とうとも思わなかった楊貴妃は政治の犠牲になってしまったのである。この悲惨な女性の姿を描き尽くすことが、「楊貴妃伝」という作品の重要な主題であった。井上は、楊貴妃が高力士に殺されたというただ一つの真実だけを頼りに、何故殺されてしまったのかその過程を歴史小説らしく見事に創作したのである。井上の創作部分

は、より楊貴妃という女性の悲劇性を強調させる結果となった。

結び

高力士は中国の歴史の中で有名な宦官である。本稿では、「楊貴妃伝」での、宦官・高力士の役割について考察した。中国の史料『旧唐書』、『新唐書』、『資治通鑑』及び伝記小説「高力士伝」の中で、高力士のことが記された箇所があった。「楊貴妃伝」では、井上は主に中国の史料『新唐書』を参考にし、「力士・上直すれば、吾寝ぬること則ち安し」という玄宗が信じた忠臣としての高力士の姿を忠実に描き出した。

他方、井上は『新唐書』などの中国の史料に記されていない楊貴妃と高力士の関係については創作した。豊かな想像力を發揮して、高力士とはどんな人物かを描き出した。高力士とは楊貴妃を安心させる人物であり、楊家一門の昇進に助力を与える人物として創作したのである。すなわち、楊貴妃にとつての高力士は、相談役および策略の黒幕という役割を担う人物だったのである。楊貴妃は自分の地位の安泰を願って高力士を頼り、いわれるがままに従った。しかし高力士の優先順位は、国および玄宗だった。だから楊貴妃は信頼していた高力士に殺された

のである。このような楊貴妃の悲しい運命は作品の重要なテーマであり、楊貴妃が高力士という人間の策略の犠牲となった過程が、井上独自の創作箇所によって鮮明に浮かび上がる。井上靖は、豊かな想像力を駆使して加筆し、絶世の美女と歌われた楊貴妃の悲劇的な運命を、高力士という有能かつ錯視の宦官との関係で、見事に描出していったのであった。

〔参考文献・注〕

- (1) 大野実之助 『楊貴妃』 春秋社 昭和四十四年九月五日
(2) 『和刻本正史 唐書(影印本)』 汲古書院 昭和四十五年八月

(3) 注1 同

(4) 秋岡 康晴 『楊貴妃伝』と『長恨歌』 『井上靖研究』 第二号 平成十五年七月二十日

(5) 王昶 『金石萃編』 経訓堂藏版 出版年不明

(6) 注2 同

(7) 注2 同

(8) 注1 同

(9) 井上靖 『楊貴妃伝』の作者として 『楊貴妃伝』(中国語訳) 中国黒龍江人民出版社 昭和六十年十月

(10) 注2 同

(11) 『続国譯漢文大成 資治通鑑第十二』 国民文庫刊行会 昭和四年七月三十一日

(12) 注2 同

(13) 注2 同

※ 井上靖の作品本文は、『井上靖全集 第十五卷』(平成八年七月十日 新潮社)に拠る。なお、本稿の中国語の原文引用後、論者による翻訳を付した。

(そ よう／本学大学院生)